

11 . 最初のバナナ (タガログ)

たいへん昔のことです。マリアン・マガンダと呼ばれる美しい王女がいました。その名前の意味は「美しいもの」ということです。

彼女は大きな森のそばに住んで、そこでは、最も美しい、色彩豊かな、良い匂いのする植物と花が育っていました。毎日、王女は美しい花を摘むため、森を抜けて歩いていました。それで長い花冠を作っていました。彼女は自分の髪や頸や体に多くの美しい色のくさりを巻きつけました。これらの花は、もう十分美しい王女を引き立たせるだけでした。

ある日、王女がまた新しい花冠のために、花を摘みに森へ行っていると、彼女はハンサムな若い男に会いました。彼らはお互いの目を見るなり、お互いに好意を抱くようになりました。

その日からは毎日、彼らは森で会い、花の中を手と手を取って一緒に歩いて、彼らはお互いをたいへん愛しました。

ある日、森の美しい花の絨毯を歩いて行くと、王女はこの日見た花の、特別な美しさについて語りました。

若い男は、王女に向かって微笑みました。「これらの花は本当に美しい。」と彼は言いましたが、「しかし、それらは、私の世界の花ほど美しくはない。」と言い足したのですが、彼の口からこの言葉が出るなり、若い男は、「これは言うべきではなかった。」と気付きました。

「それはどういう意味？」困惑した王女が尋ねました。「あなたはこの世の人じゃないの？」

その若者は今や、美しい王女に、真実を告げさせられました。「そうではない。」と彼は答えました。「僕は別の世界からの者だ。神々の国。私は人間ではないんだ。」

王女は啞然としました。しかし、彼女が若い男の言ったことを理解しようとする前に、彼は去ろうとしました。しかし、王女は腕で彼をつかみ、彼女の方へ引っ張り返しました。「待って！行かないで！」と王女は言いました。

フィリピンの神話と伝説 11 . 最初のバナナ

若い男は、地平線の方を見ました。そこでは、太陽が、どんどん沈もうとしていました。「僕は一日の終わりに、太陽が沈む前に、私の世界へ帰らなければならない。」と彼は説明しました。「そうしなければ、君に会いに、もう一度来ることが許されないんだ。」

「それじゃ、私をあなたの世界へ一緒に連れて行って！」と王女は懇願しました。

「だめだ！」断固として若い男は答えました。「人間が神の国へ入ることは、厳格に禁じられているんだ。さあ、私を行かせてくれ、マリアン・マガンダ。太陽が消える前に。」

しかし、王女は若い男を行かせたくなくて、力づくで彼の腕にしがみつきました。「いいえ、私を残して行かないで！」彼女は頼みました。「私はあなたと永遠にいたい！」

しかし、若い男は、泣きじゃくる王女から自由になるために、もがきました。そして、地平線に向かって走って行きましたが、太陽はすでに沈んでいたのです。彼には遅すぎて、もう二度と王女の所へ、帰ってくることはできなくなりました。「愛しているよ、マリアン・マガンダ！」彼は叫び、地平線に消えると、もう二度と見えなくなりました。

その泣きじゃくる王女は、彼女から走り去る恋人を見ることはできませんでした。しかし、彼女が涙に濡れた目をゆっくり開けると、彼女の手に、彼の腕をつかんでいるのを見ました。

王女は、大好きな美しい花の中央に、若い男の腕を埋めることにしました。

数日間、王女は森を訪ねることができませんでした。恋人を永遠に失った、つらい思い出がよみがえるからです。そのかわり、彼女は家にいて、ベッドに横たわり、泣き続けていました。それから数日過ぎて、彼女はもう一度勇気を出して、森を訪ね、そして、彼女の愛した美しい花を見たり、香りを嗅ぎに出かけました。

彼女は森に入ると、花の絨毯を通りすぎと歩きました。そして、彼女はびっくりするようなものを見ました。新しい、珍しい植物が、数日前、彼

女の恋人の引きちぎられた腕を埋めた所から、育っていました。

びっくりした少女は、その植物をじっくり見ました。それは、広い緑の葉がありますが、枝はありません。その時から、王女は、毎朝森へ行き、このめずらしい植物に水をやり、やさしい言葉を大きな葉にかけて、よく育つように勇気付けました。

その王女のやさしい愛の世話がコツでした。珍しい植物はすぐに大きな花を咲かせはじめました。そして、間もなくこれらの花は、長い黄色の実にかわりました。それは大きな指のようです。それは、まるで彼女の恋人の指でもあるかのように、そして、彼女に触れようと、追い求めているように。

何年もして、この珍しい植物は、もっと広がってゆきましたが、それはすべて、長く、曲がって、人間の指のような形をしています。私たちはこのくだものをバナナと呼んでいます。